

発題

自然といふこと (第一部)

生命と生といのち——人間として生きること

上田 閑照

「人間として生きること」、私たちは人間として生きているのであるから、人間であるということはわかっていることのもある。また、このように生きていっているわけであるから、生きていけると言えるように思われる。しかし、人間であることの中には、どのような具合かで、またどこか深いところで人間が人間でなくなっていく、反人間的に、あるいは非人間的に、しかも自分でそうなっていくというところがある。それによって、初めて人間であると言えるのである。

私たちは確かに生きているのではあるが、本当に生きていのかと問われるならば、本当に生きているとき

ちんと答えられることはむしろ稀なのではないだろうか。人間として生きているということはどういうことか、あらためて考えざるを得ない。

人間とは何かということについては、様々なことが言われてきた。昔から人間を生物の一つの種とみて、他の生物と並べて対象的に人間という種、ヒトという種の特異性、種差を客観的に見出すという仕方、「理性をもつ生物」、あるいは「言葉をもつ生物」というような規定がなされている。

確かに客観的に一義的にはそうであろう。しかし、そのように人間を客観化して規定するのが当の人間なのであるから、そのこと自体が人間が自分自身につい

て知るといふ意味をはじめからもっている。自己知、あるいは近代的に言えば自己認識といふことである。

そこに実は大きな問題性が現われてくる。自分が自分について知るといふときに、そのことによつて自身に執着していく、執着した形での自己意識、日本語でいふ自意識のようなものになり、自意識に閉じられた人間として社会において他者と関わっていくといふ形になる場合が多い。

しかしまた、自分を知るといふことからして、自分がそついつた自意識的な自分であることがわかり、そついつ自分は何らかの仕方で反省し、否定し、自身自身を開いて、自由に他者と親しむ、あるいは物と関わるという方向に自分を直していくこともあり得る。これは、日本語で特に「自覚」といふときに意味する方向である。

自分が自分を知るといふことは、自己に捕らわれた自意識のようになるか、その自意識の自己が破り開かれて真の自覚的な自己になるか、最初から揺らいだ問題であり、その揺らぎの中で自分をどう決めるかが、

まさに「自己」といふことである。

人間として生きるということの中には、このように「こつなるか、ああなるか」といふ問題が最初から含まれている。どちらでもよいというわけではない。人間ではなくなる可能性がはじめからある。そして人間ではなくなつたような自分を改めて、人間として生きる努力をすることが、生きるということの中に様々な仕方含まれていなければならない。

そこで、生きるということがどういふことが、それを少し考えてみたい。日本語を手がかりにしてみると、生きるということを示す言葉が種々ある。例えば「生命」といふ言葉がある。それから、生活あるいは人生といふときに使う「生」といふ言葉がある。それからもうひとつ、「いのち」といふ言葉もある。

どうしてそのように異なつた言葉があるのか。これは人間が自分自身について知る自覚的な存在であるということからすると、生きる、あるいは生きていることをどのように自覚しているか、その自覚の異なつたあり方が異なつた言葉の中にあらわれていると考える

ことが出来る。そして、この三つの言葉があらわすそれぞれ異なった三つのあり方の連関、その生きた統一が、人間が本当に生きていると言えるところである。

この三つの言葉は、最初から定義があつて使われるわけではないので、一義的に区別することはできないが、その言葉が使われるときの含蓄の顕著な特色からすると、次のように言えるであらう。

「生命」とは基本的には生きとし生けるもの、生物一般に通じる生命を指す。それから「生」という言葉は、生活や人生という言葉が示すように、これは際立つて人間的な「生」である、あるいは広い意味で文化的な「生」であると言つことができる。それに対して「いのち」とは、よく私たちが「物のいのち」とか、「仏のいのち」と言つように、生物的な「生命」とも、また人間的文化的な「生」ともその質を異にした根元的な「いのち」と考えることができる。もちろん、これは意味の含蓄の顕著な傾向を特に取り上げたわけであるから、このような使い方でなければならぬということではない。実際に例えば、「神の生命」という言い方は

宗教の書物などでも使われている。

しかし、あるニュアンスの違いをもって三つの言葉で言い分けられることを大きく取ると、このように考えてよいと思う。

この生きる三つの在り方は、それを扱う学問との関係で表わすと非常に違いがはっきりしてくる。「生命」に関しては、昔は生物学とか生理学、現在では特に生命科学という言葉で非常にはっきり出てくる。それから「生」は学問上では「生の哲学」。これは日本語では翻訳語として最初は使われたが、哲学では既に定着していて、「生の哲学」というと人間的な「生」の在り方の究明である。広い意味の文化を生み出し、文化によつてつくられていくような人間的な「生」を扱う、それが「生の哲学」である。

しかし、「いのち」に関しては、それを直接に対象にして扱う学問はない。というか、成り立たない。学問ではなくて、文学とか芸術、あるいは宗教によつて「いのち」が自覚される。「いのち」の自覚の表現として、様々な文学や芸術がある。もちろん、書かれた作

品としての文学を対象にする学問は可能であるが、文学を生み出す、生きるその働きそのものを対象にする学問はない。対象化することでは触れられないところで営まれているのが「いのち」だからである。「いのち」は学問によって理解され得ない。「いのち」は、「いのち」の言葉によって目覚ましめられる。

以上のように分けて見られた三者はどのような連関において私たちの「人間として生きること」をなしているか。人間の問題であるから、人間の肉体的「生」を中軸に見ると、「生」は一方では「生命」とつながり、他方では「いのち」につながっているが、その際、「生命」と「生」の場合と、「生」と「いのち」の場合と、そのつながり方は非常に異なっている。

肉体的な「生」の中には、生活の面と人生という言葉で言われるところがあることは、先に述べた。生活というところで見ると、これは「生命」とのつながりの上で、「生命」の量的な飛躍によって成立してくと見える。これに対して、人生という方向で見ると、むしろ生きていくことの何らかの仕方での否定を足場あ

るいは跳躍板にして「いのち」に触れていくそのような方向になっている。

生活、つまり衣食住を基礎とする文化的な「生」は、「生命」の「より多く」「より以上」という豊かさの現であり、その豊かさは「生命」自身の創造的な発展から生み出されてくるものである。したがって、生活という面で見ると、肉体的「生」は「生命」の創造的な進化の線上にあるものと言える。このために、生活に即して見る限り、「生命」の発展に沿って「より豊かに」ということが人間の生きる原則になってくる。したがって、また「豊かな生活」が基本的人権として要求され得るということにもなる。

しかし、それは生活という断面だけで見ればそうなるということであって、それに対して私たちが人生という言葉で感じる人間の生き方には、「たとえ貧しくとも」ということがはっきり言えるところがある。生活の豊かさが人間として生きる意味の充実にはならないということである。これは「生命」からの創造的な飛躍の線を断ち切ったところから出てくる「生きる」質

だと言える。「生」を人生という面から見るとき、「生命」ではなく、「死」が大切な問題になってくる。生物的生命の死ということではなく、宗教が象徴的に言うような、「死んで甦る」と言うときの「死」である。「生活」の豊かさに対して言えば、それははっきり否定できるような貧しさである。これは社会的に強制された貧困ではない。物をもたない生き方、生き方としての自由な貧困、自発的な「貧」、内的な「貧」である。一遍上人に「衣食住は三悪道なり」という言葉がある。これは極端な言い方の方ではあるが、生活の豊かさの追求が実際には様々な仕方での物や場所をめぐる争奪を伴うことを思うと、「三悪道なり」という極言も理解出来るであろう。生活ということからすれば豊かな生活するのが人権であると言うことができるのに対して、人生という言葉で感じられる人間の生き方の中には「衣食住は三悪道なり」とはつきり言い切ることの出来る所以がある、ということである。このように「生」における「人生」の面には、「生命」に対しては「死」、「豊かさ」に対しては「貧」にふれるところがあ

り、この方向での否定の徹底が「いのち」につながってゆく。大患後の漱石は「死は生よりも尊い」と言う。「死は生よりも尊い」ということがわかって生きる、それが「いのち」の生である。

このように中軸になる、際立って人間的な「生」において、「生活」の面と「人生の面に異質性があり、実際にギャップがある」ということは、「人間として生きること」がはじめから根本的に問題적であるということをしめしているであろう。「人間の生涯」はまた三つの事態、人生と歴史的社会的な生と境涯という連関をなしているが、この連関と今見ている「生命—生—いのち」という連関とのつながりを見定めておきたい。「生命」は今の連関ではじめて表に出てきた。「生」における「人生」は同じであり、「生活」は歴史的社会的生と基本的に重なっている。例えば平安時代の生活と現代の生活とは殆ど実感出来ない程おそろしく違っているが、男女の気持など人生の事は平安時代の文学であつても直接に心にひびいてくる。そして「境涯」は今の連関での「いのち」と基本的に重なっていると

える。

以上、「生命」、「生」、「いのち」という生きる三つの質の連関を見てみた。ところで、そのような生きる営みはそれだけで成り立っているのではない。常に、生きる「場所」と切り離すことができない。その場所の性格から見ると、「生命」は、有機体の種に応じてその種と一対一で対応している特定の環境という場にある。それに対して人間的な、文化を営む「生」の場所は、歴史的社会的な「場所」、現在の言葉で言えば、意味の場、あるいは意味空間である。人間が「生」を営む場所は、様々な意味の場が並んだり、含み合ったり、重層的に絡み合ったりしている。それらを連関づけて統合する包括的な意味空間を哲学的に「世界」という言葉で言うならば、人間的「生」の場所は世界であり、人間的「生」は「世界内存在」である。これが人間の人間としての存在の根本規定である。生活であつても人生であつても、人間が生きる場所は「世界」である。環境と世界とは基本的な区別がある。哲学の上で環境と世界とははっきり原理的に区別した最初の哲学者

はマックス・シェーラー (Max Scheler, 1874-1928) であるが、それ以後、哲学的人間学の根本的な知見になっている。単純に言えば次のようなことである。人間も生き物であるから、種と一対一の形で対応する環境の中にあるわけであるが、直立という形態学的な人間の特性と連関して、閉じられた環境に対して言えば、限られない開けに開かれている。そして直立することによって手が自由になるので、その限られない開けの中で、自分が生きる場所がどういう場所であるべきかという構図を描き、自由になった手で、その構図に従って与えられた環境を加工していく、ということが起こる。これは人間存在にとって最も基礎的な事態である。世界とは、そのように人間が直立して限られない開けに開かれるということ、しかも漠然とした開けではなく、そこでわれわれが生きていくためにはこういう場所であればならない、こういう場所が望ましいという一種の構図が描かれた「意味の場所」である。これは生物が生きている環境とはレヴェルの異なるも

のである。これを特に「世界」と言う。

では、「生命」に対しては「死」、「豊かさ」に対しては「貧」という徹底的な否定を通して生きられる、「いのち」の場所は、どういふところか。どう言えばよいが、表現が難しいが、古来、様々な宗教がその宗教の言葉で語ってきている。例えば「神の国」という言葉がある。あるいは「彼岸」といふ言ひ方。あるいは「仏の国」とか「浄土」といふ言ひ方もある。しかし、それらはすべて人間の文化が営まれる世界のアナロジーから、それになぞらえて、表象によって、そう言っているのであり、そういう表象によって言われるものは、われわれが世界の中で見るものとは質的に異なっているはずである。

一挙に単純に言えば、豊かさを否定した貧、生きることを否定した死を通して初めて生きられる「いのち」の場所は、「何処」「どのようなところ」といふことが言えない場所なのである。環境に縛られることもなく、世界に閉じられることもない、真に限りない開けそのものである。大乘仏教の経典などでは、そこを「虚空」

という言葉で示すことが多い。

虚空には、勝手に行くことはできない。世界の内にあるという在り方が否定され、象徴的に言えば死ぬことを通して初めてそこに行くことができるようなところである。真に限りない開け、それが「いのち」の場所である。「いのち」は、死んで甦るといふ仕方では生きられる。「いのち」だと言える。

大切なのは、人間が生きることの中にはそこまでのことが含まれているということである。人間が生きることの中には、生物としては生物一般に通じるような「生命」があり、その意味で環境に依存している。しかし文化を営む人間としては、世界の内に存在し、世界を積極的に有意味に構成しつつ生きていく（人間の場合は環境も世界のうちで「文化」化されて、厳密な意味の自然（傍点）環境ではなくなっている。しかし後述のようにあらためて「自然（傍点）環境」ということが問題になる境位がある）。しかし、それで終りではない。もうひとつ、限りない開けに開かれた場所がある。そこは、死ぬことによってのみ行くことのできる

ようなどころである。と言っても、それは死んでから行くところというのではなく、こうして生きていくときに既にそこまで在り方が届いている生き方の場所ということである。一遍上人が「衣食住は三悪道なり」とはつきり言えるのは、限りない開けに死を通して届いた「いのち」の言葉である。

要は、私たちが生きている場所は、世界内存在と言われるときの世界だけではないということである。そうではなくて、世界を超えて世界を包むような、限りない開けに於いて私たちの世界があるということである。私がここにいるということは、ここにいるだけではなく、それを超えたところまで通じたこの場所にいるわけである。それを超えたところだけをとれば、死を通して届いているのであるから、そこだけを言えば、もはや私は存在しないと言わなければならない。したがって、私がここにいるということは、いないという仕方でもここにいて、そういう言い方をしなければならなくなるわけである。

このことは、哲学や宗教の中では様々な言い方で言

われてきた。例えば「我は我であつて我でない」、「われならぬわれ」など。そういうことの一番根本は、私たちが存在する場所は単に世界の内だけではない、私たちは世界を超え包む限りない開けに同時に於いてある、ということである。世界の内では「我」と言えるが、世界を超え包む限りない開けでは「我なし」である。「我は、我ならずして、我である」という、そういう連関が私たちの本来でなければならぬ。仏教が「無我」という言葉で言おうとすることも、キリスト教神祕主義の根本句とも言うべき「もはやわれ生くるにあらず、キリストわがうちにありて生くるなり」（パウロの言葉「ガラテア書」二・二〇）も、この人間存在の根本構造の実存会得のそれぞれの仕方と言えるであろう。

このようにして、「世界内存在」としての私たち人間の存在する場所は、世界と「世界を超え包む限りない開け」との二重になっている。しかしそれは見えない二重であるから（見えるものとしては「世界」、見えないものを見ないで、見える世界の中だけをわれわれ

の存在の場所とすることが起こりがちである。主体に即して言えば、それは、「我は、我ならずして、我なり」ではなく、「直線に連続的に」「我は我なり」という「我」、根本的に自閉的自執的な「我」（仏教で言う「我（が）」）に変質することである。

しかし、それで済むということではない。見えない世界を見ないで、この世界だけがわれわれの世界であるとすることによって、世界の中に様々な歪みが起こってくるからである。皺とか亀裂と言ってもよい。同時に、「我は我である」というように我に閉じてしまうことによって、その閉じられた我の中にコンプレック스가生じ様々な問題が起こってくる。我は開かれなければならず、私たちの世界は世界を超えた開けの内にあるのだということがはっきり自覚されなければならぬ。

ところが現在は、むしろその逆のことが加速度的な速さで起こっていると言わざるを得ない。「生命—生（生活／人生）—いのち」という三者の連関全体が生きられるということが本当に生きるということであるの

に、現在は、真ん中の人間的「生」、しかもその中の生活という一面だけが異常に膨らみ、文化の超肥大とも言うべき現象が起きている。いま文化と言ったのは、文化と文明を区別せず人間が人間として営む在り方を指して言ったのであるが、そこが極度に肥大し、「生命—生（生活／人生）—いのち」の生ける連関を狂わせてしまっている。元来「より豊かに」への方向をもつ「生活」が、超技術の手だてを得、高度産業社会の場を得て、殆ど無制限に自己増殖しつつある。

「生活」の一面が肥大して、世界の中の動きが加速度的に速くなり、しかもあらゆるものをその運動の中に巻き込み、そして人間自身がそこから全く出られなくなっている。出られないというのは、世界を超えて世界を包んでいる虚空、すなわち「いのち」の場所に行けないということである。さらにまた、これはその場所が塞がれたというだけではない。そこまで肥大した人間の在り方が、もうひとつ前の「生命」が営まれる環境をも破壊するところに来ているのである。環境破壊という問題は非常に自立しやすいし、現在でもよく

言われていることであるが、それが人間存在にとつて
どという性質の狂いであるかという点、「生命—生（生
活／人生）—いのち」の連関の中で、「生」における生
活の面だけが科学・技術・産業・経済の独占的な肥大
によって「生命」の世界をも破壊し、「いのち」への道
も塞ぐことになっているという狂いなのである。全体
の連関を歪め狂わせた「生活」の自己増殖の中で、そ
のような生活は、本来の限りない開けではなく、空虚
にさらされ、本来の生命ではなく、異常な欲動につぎ
動かされている。それがはつきり自覚される必要があ
ると思う。

というのは、例えば環境破壊に対して、今度はそれ
を技術的に解決するという発想が出てくるからである。
事実、現在様々な仕方ですういった工夫がなされてい
る。それはさしあたっては必要かもしれないが、その
こと自体がさらにまた文化の肥大を引き起こすという
ことになる。そのことが「生命」において生きとし生
けるものつながりをますます疎外し、「いのち」への

道がますます塞がれることになってしまふ。

人間はもともと決して単に自然な存在ではない。直
立して手で環境を加工するその基本的なあり方におい
て、既に不自然なところがあると言わねばならない。
しかしそのような不自然が、「生命—生（生活／人生）
—いのち」という、内に（「人生—いのち」において）
否定性を含んだ全体の連関の中で、大きなサイクルに
よつてもう一度自然化され、解消されて、人間として
生きることも、他のすべての存在と共に生きること
も、可能であつた。ところが、不自然をもうひとつ大き
なサイクルで自然化するそのサイクルが、「生活」とい
う一面の量的な肥大によつてきかなくなつてしまい、も
とに戻る事ができない。むしろ駆り立てられるよう
に進み、進めば進むほど不自然の度が高まつてゆく。

それではどうしたらよいのか。これはほんとうに難
しい。考えると、出どころがないようである。

社会全体の雰囲気が決定的に変えられなければならない。
消費がおちこんだ、景気が悪くなったといつこ
とばかりが（それが実際にどんなに大変なことであつ

ても——そして大変というならば人間としてもっと大変なことがこれ程起こっていないがら)、それだけが唯一至上の問題であるかのような社会の勢いに何が水をさすことが出来るか。甦りの「いのちの水」をさすことが出来るか。

社会全体の雰囲気が決定的に変えられなければならない。社会がよくならない限りはよくならないとしても、社会的な雰囲気の地盤がなければ、一挙に客観化した制度のようなかたちで社会をよくしていくことは、おそらく不可能であろう。それだけに自覚した個人の意義が大きくなってくる。社会の中で生きている個々人は、単に社会の一員にすぎないのではなく、自分で自分の内からという生き方で生きることが可能になる原点である。これではいけないと本当に考える人間が、自分で自分の生活を変えていくこと、これは最後まで可能な道として残るであろう。そしてそれは、単に個人的なことではない。社会のなかに共に生きる個々人として個から個へと深く伝わるものがある。それが、

社会的雰囲気の醜毒素になる可能性はあるであろう。

しかし、それにしても事態の認識が重要である。「生命—生(生活/人生)—いのち」の生ける全連関が、文化の装いをとりつつ不自然の度を高める「生活」の異常な肥大増殖によって狂いつつあり、「人間として生きること」が破綻に瀕している。しかも人間だけのことではすまず、所謂自然破壊はもはや回復が不可能ではないかと危惧される程になっている。何がどう起こっているのか、上を見てきたことを、「自然」の問題で受け取り直してみたい。

レスポンス

本多正昭

はじめに——紹介に代えて

上田閑照という四文字をじつと観ていると、これがそのまま上田宗教哲学の根源語のように思えてきます。訓よみでは「うえだしずてる」、音よみでは、名が「かんじょう」ならば、苗字は「じょうでん」。上田（じょうでん）とは、上質のたんぼのことで、多くの日本人にとっては、必要なる唯一の食物（米）を、田植えや稲かりなど、人の「間」にまじって自然の恵みを産出する場所であります。次に閑照（しずてる・かんじょう）とは、その上田（じょうでん）を真如の月が閑（しず）かに照らしている、そんな風光を連想させます。こうして姓と名とのいわゆる「二重構造」＝「根源的いのち」の構造は、ちょうど「十牛図」の第八―九―

十、つまり《絶対無―自然―人―間》の三一的相互浸透の唯一の場所を象徴しているように思われるのです。以下、「いのち」への道を塞ぐものと、「いのち」への開け（気づき）がもたらすもの、各々について、簡単なコメントを試みたいと思います。

コメント（一）

「いのち」への道を塞いできた近代日本の「知力主義」（近代知）について

無媒介的に肯定された我をも世界をも超えて、我と世界を共に包んでいる「いのち」、このような究極の場所は、たしかに現実には塞がれている。それは、「生命―生（生活／人生）―いのち」の三一的連環の中で、「生」の中の「生活」の面だけが、科学・技術・産業・経済の独占的な肥大化によって、一方では自然と生命への破壊が進み、他方ではそれによって人間の根源的な「いのち」への道があらかじめ塞がれているためである。技術の肥大化がもたらした環境破壊を、ふたたび技術的に解決していこうとすることが、一方では

「生命」において生きとし生けるものつながりをまます疎外し、他方では「いのち」への道をまます塞いでいる（二三―三四頁）。以上は、現代社会の末期ガンの症状に対する上田氏の人間学的診断のあらましであると思われるが、ここでは特に上記傍線の部分と表裏一体をなす他の二面についてコメントしたいと思う。

日本は明治開国以来、西欧化・アジア武力支配・反宗教教育等をがむしゃらに推進して来た。日本の近代化は、こうした富国強兵策の一環として進められたものであるが、それは西洋近代文明の中からこの政策に役立つところ、いわば「花だけを切り取って移植を試みた」に過ぎなかった。西洋の・近代の・文明が、その古代・中世あるいは東洋のどの文明とも異なる第一の特徴は、「知力主義」に他ならない。これが文明の推進力となり、取り敢えず日本独立の条件とされたのである。ところで、これに対するに徳育をもってせず、この「知力は悪をももたらすが、より優れた知力をもつてするのが、知力主義」なのである。（山県三千雄）そして、この「知力主義」こそが、上記下線の部分が

示す「技術主義」のまさしく生みの親なのである。ここで決定的に重要なことは、知力は人間の能力の一部に過ぎず、決してその逆ではないということ、また人間の真の形成と新しい文明の創造は、ひとえに「根源的いのちへの気づき」からはじまるということである。

今日では特にエコフェミニズムの立場より「男性中心の支配的な思考から導かれた文明の弊害」、「男性原理に基づく知の偏重と科学技術の独走による人間疎外や自然破壊」（シスター韓）に対する深刻な危機感が、しばしば女性の側から強く訴えられているが、思つに女（母）性原理と男（父）性原理との超越的統合を促すものこそ、「根源的ないのち」そのものであろう。「近代知」からのパラダイム・シフト、根源的ないのちへの眼差しの転換という課題は、二十一世紀最も重要な地球的課題である。

わけても近代日本の忘れ物、それは基本的には、人と人、人間と自然、科学と宗教、日本とアジア近隣諸国、自己と超越者などを〈結ぶもの〉、言い換えると、東洋の伝統に底流する〈連続観（母性原理）〉の再発見

ではなかるうか。近代科学の進歩を可能にした非連続観（男性原理）は、この連続観（女性原理）に包まれて両者が相即するとき、はじめて人類の根源的場所を見いだすのではなかるうか。

コメント（2）

「根源的のち」への気づきをもたらした「ガンの自然退縮」の例について

「根源的のちへの気づき」というのは、発題論文の言葉を借りると、「生と死の相互浸透」のことであり、この「気づき」は「開け」を意味するであろう。西谷式に言えば、生と死の「二重写し」の自覚ということにもなるであろうか。

日本における心身医学の創始・故池見酉次郎氏によれば、「真の健康への道と、人間が真の自己になる道、さらに真の宗教的世界への道は、全く一つであって、自己自身についての全人間的、全宇宙的な気づきを原埋としている。この気づき（開け）は、読んで字のごとく、気のはたらきであり、この気は、人間の身体

的・心理的・社会的側面から、さらに生態学的側面まで貫通流動して、そのすべてを統御している、ホメオスタティックなエネルギーのことであると考えられる。古来、東洋には、この気を活性化させるための多くの行法や療法がみられるが、これらの行法のなかには、死に対する恐怖感を和らげたり、人間の実存変革を促すものもあり、驚くべきことに、この宗教的実存変革が（つまりは「根源的のちへの開け」が）ガンの自然退縮と関連しているような事例も少なからず発見されている」という。（拙論「池見「身心」医学における東洋的「気」をめぐって」『産業医科大学雑誌』九（四）四三—四三三（一九八七）より）池見氏が紹介している事例のなかに、大阪の歯科医師会会長であった後藤美基氏の場合がある。氏は、剣道七段、居合道八段、小学校以来の熱心なクリスチャンであった。六十九歳の時、末期ガンの告知を受け、剣道は厳禁される。「私が死ぬ。私が死ぬ。」「死とは何か。…いくら自問しても分からない」。暗澹たる思いに苦しむが、「すべてを神に委ねよう」と思い直す。やがて「生こそは、死へ

の確かな歩みであり、それゆえに一日一日の死ではないか。惨めならざる死とは、とりもなおさず惨めならざる一日一日の生き方であったのだ」と気づく。生と死の相互浸透、生死一如への気づきである。氏は更に、何もかも自力で生きて来た自己の傲慢さと同時に、何から何まで生かされていたというのちの事実に気づかされる。「涙が吹き出して来た。ぬぐってもぬぐっても、あとからあとから涙がとめどなくふきだして来た。懺悔の涙の中で私は、すみませんすみませんと、だれにもなく、謝罪の言葉を繰り返し、涙ながらに懺悔の祈りを、心の底から神に捧げた。」とつしてこんなに素直になれるのだろう。どうしてこんなに幸せになるのだろう。「思いあがっていた私（エゴ）が、ガンという思いがけない絶望的な極限状況の中で、木っ端微塵に打ち砕かれて、受ける価値のない私、真実なる私（セルフ）に気づいたのではないだろうか」と。この宗教的回心（実存の変革）から七年の間に、「ガンの病巣は、写真で見ても触診してもらっても確実に縮小の一途をたどっており、まさに消失寸前の状態と

なった」。そこでもうガンと仲良く暮らしたいと思うようになる。剣道の指導を続け、八十五歳で逝去。

池見氏が、この記事に付記された率直な感想は以下の通りである。「科学者として、クリスチャンでありながら東洋の道を究められた先生の場合、西洋的な信仰が東洋的な道に裏付けられることによって、珠玉の人生を展開されているところに、私は深い感銘を覚えました。すなはち、身をもって東西の宗教を結ぶ道を拓かれた先生に、ここからなる敬意と感謝を捧げます。『セルフ・コントロール』一九九四——、日本心身医学協会」

ここには、池見氏の「超越における上昇と下降」（拙論）への共感とともに、心身医学の国際学会を通して痛感された西洋的キリスト教の一面性に対する問題意識も暗示されているように思われる。

討議

司会 本多正昭

奥村一郎 おそらく最も人間にとつて大きなことは死です。人間は確実に死んでいきます。死ぬべくしてつくれた人間。つくれたのは神であつて、自分で生きていくのではない。生かされているのです。それが一つでもう一つは、キリストの復活の問題です。復活の問題は人間の死なくしては考えられません。そして復活の面から見ると、死ぬことこそ永遠に生きることだ、と切り替わっているわけですね。これにつけて思い出したのは、一月二十六日、東京の新大久保で韓国の李さんとカメラマンの関根さんが、酔った人を救おうとして三人とも亡くなった出来事です。この出来事は非常に大きな感動を皆に与えました。わたしはちょうど一時間前に通つたためもあつて、息がつまるほど感動しました。そのとき思い出したのは、「友のために

命を捨てるより大きな愛はない」というヨハネ十五章の言葉でした。そこでふつと思つたのですが、あのときお二人の方は友のために死んだのではないわけです。毎日新聞に「こういう事故は毎年起きているが、全く知らない人のために二人が死なれたことは皆無であつた」とありました。何も知らない人のために飛び込んでいった。このような死はどこからくるのだらう。人間からは来ない。イエスの言葉も足りないじゃないか、と思つたりしました。「神は万人をひとり子のように愛される」という聖アウグスティヌスの言葉がそのとき浮かんできました。万人ということは神だけしかできないですけど、だれであつても、ということですね。一人あるというだけで命を捨てるほどの愛がある、あるはずなのだが、わたしたちにはない。ないということに罪の問題も起きるのではないか。罪の問題は愛と関係がある。四苦のうち、最も大きな問題としての死を乗り越える道を教えて下さつたのは仏陀だと思つのですが、死を乗り越えるだけでなく、それを永遠の命へとつなげるのが復活ではないか。だが、もう一

つわたし最近困るのは悪の問題です。悪魔悪霊は聖書に頻繁に出てきて、キリストはそれと正面切つて闘っています。悪と悪魔の問題と死と愛の問題と、その四つの言葉がわたしのなかで渦巻くです。そのところに何か光を与えていただいたらありがたいのですが。

上田閑照 光を与える、そんなことできませんよ。わたしが言えるのは、抽象的かも知れないけれど、本当に生きるという問題の中には、はつきり死を通して、ということが入っている、それだけははつきり言えます。その死をどういう形で、ということになると、これはやはり色々文化の伝統とか、歴史的な背景とかと結び付けてくると思うのです。例えばイエスの死の問題にしても、復活という言葉ではつきりさせていいと思うのですが、それに対してだれがどう考えるかという問題ではないと思うのです。

それからさっきの大久保の駅のことです。感動的なことだとわたしも思うのですが、最初から死を賭して、というように見るときにはやはりある種の解釈が入っ

てます。死ぬかどうかはそのとき考えないと思うのです。それでただ飛び込んで救おうとした。その単純な事実になんか感動するのです。死を賭してという言葉になるのは、話になってからだと思うのです。話になる以前の単純な行為、それがやはり人間の意志の中にあるということ。それがどこからくるか、それは人間からくるのではない、とすぐに言ってしまう必要はない、と思う。本当に生きるということはそういうことだということに、わたしはあるときもそう受け取りましたし、今でもそう思います。そして、わたしがその場にいたとしたらどうか、それは問いとして残ります。大きな問いとして。しかし、それもわたしができるとかできないという答えはそこに出ないと思います。そのとき、同じようにするかも知れないし、そのとき躊躇してしないかも知れない。わからないです。個人の意志を超えた出来事だということです。そういう意味でわたしは非常に感動した。わたしが強調したいことは、本当に生きるということの中にはやはり死を通してということがある、これだけははつきり言え

ます。ただ一人一人の生き方の中で、それがどういう形でリアルになるか、これはいろいろ違いがあるのではないか。

わたしとしては、どうして本当に生きるといふことには死を通すということがあるのか、人間理解の中にそういうことをどういう形で基本的に出すことができるか、それが非常に大きな問題なんです。わたしたちの生きている世界が見えない仕方です。二重になっているとか、「我は、我ならずして、我である」とか、そういうことを人間存在の一番基礎に見たいと思います。この基礎のところには否定が含まれていて、不安定性がある。どうするか、どうなるかわからないところがあります。多くの場合、「我は我なり」と言ってしまうって、我を出す仕方になってしまいます。「我ならずして」というのは消されてしまう。しかし、決してそれでいいというわけじゃない。そういう事態があるということはどう理解するか。

本多正昭 先程、友のために、というのが出たが、そ

の瞬間に相手は友なのではないか、初めから友と友でないものと分けておいて、友のために命をすてる者とは言われたのではなくて、友はつくるもの、見いだすもの、与えられるもの、その瞬間瞬間に、という気がしました。

八木誠一 愛するから友になるんで、友がいて愛するんじゃない。良きサマリア人、あれですよ、隣人がいて愛するんじゃない、自分がまず隣人になるんだ。友と敵と分ける必要はない。

奥村 ありがとう。少しわかりかけた。最後にちよつと思ひ出すのは、ホモ・ヴィーヴェンス・グロリア・デイ、「死を越えて」生きる人間は神の永遠の死の栄光である」という一千年近くも前にあるイレネウスの言葉です。少しピカピカする言葉だから、くすぶらせの方がいいと思うのですが…。

上田 別にくすぶらさなくてもいいと思う。ということとは、人間のさまざまなこと、あらゆる苦難や運命や

悪や罪を含めてその全体がホモ・ヴィーヴェンス。それがそのままグロリア・デイ。グロリアも必ずしもピカピカと受け取らなくてもいいのではないのでしょうか。ということとは、人間ということを考える場合にもう一つなにかを言わなければ、本当に人間ということとは言えないということだと思います。で、そのもう一つ何かと言うときにはいろいろ文化の伝統や宗教の伝統があつて、ある場合にはそこで神ということがでてくる。仏教だったら、グロリア・デイの代わりに「空」ということがくるかも知れない。浄土教の場合だったらもつとはつきりしている。人間というものをずっと見ていった場合に、どうしても人間でないところをはつきり含んだあるものを同時に考えないと、人間が人間にならない、そのところがわかるかわからないか、ということですよ。

松岡由香子 わたくしは鈴木格禅先生の晩年のことをちよつと存じ上げていたのですが、格禅先生は、酵素が非常に良く効くということがあつて、たくさん酵素

をお飲みになっていました。鉱泉治療で癌が短縮するという話も伺っています。ただ、そういう心身相関のいのちということとは、どうかすると道教的な長生きの方のいのちじゃないか、という気がするんですね。先生はもう駄目かと思いつつも、坐禅をなさり、人工肛門をつけて説法をなさつた。そこに命がけの、仏のために生きるいのちが賞かれていた、先生は自分の生きることはとくに放棄しておられた。死に物狂いで仏法のために生きておられた。格禅先生がお医者様の見立てよりも長く生きられたのは、いのちへの気づきということをもつていらしたからかな、という気がするのです。そういう命の気づきの大切さを、上田先生は言われたのではないのでしょうか。

上田 そうです。格禅さんにとっては一月早く死んでも二月早く死んでも全く同じことですよね。ただ生きている限り何をするかということが非常にはつきりしているわけですよ。それは死ぬということがはつきりわかっているということと結びついています。だから

こそあそこまで生きられたのです。いのちに開かれて
いるということは、長生きするということと同じでは
ありません。

現在のありようは基礎的な自然まで破壊されている。
人間はどうでなければならぬかという発想がなくな
ったということが一番大きな問題です。これは、いつ
たん無くなったらなかなか回復できないと思う。何か
が起きると皆いろんなことを言うんだけど、実際にど
んどん悪くなってしまう。社会とか世の中というのは、
ある種の勢いというのがあるって、その勢いがある間は
変えられないのです。だからといって、ほっとしてい
いというものじゃない。気がついた人が個人の力で
できることがまだまだあると思うのですね。そういうふ
うにしているうちに、社会の勢いというのはあるとき、
突然変わるのです。これはわたしのいつもの予感なん
ですが、もうしばらくすると、ある種の破局がきて、
そこで社会全体の雰囲気が変わる。今までも何回かそ
ういう契機はあったと思います。もっともっと大きな
人為的か自然的か知らないが、破局がきてそこで社会

がとまる。おそらくそうなるんじゃないか、と思うの
です。

本多 もう時間が過ぎましたので、これで終了させて
いただきます。ありがとうございました。